

感傷旅行の記

師岡 武男

旧満州への旅は、私にとっては「感傷旅行」の色合いを帯びざるを得ないだろうと、はじめから意識していた。それは私の年齢（83歳）と、旧満州との関わりからだ。

昭和19年に、慕っていた姉が、旧奉天で24歳の若さで病死している。満鉄にいた姉の夫は、間もなく関東軍に召集され、敗戦後は囚徒と延吉の山中を逃げ回った末にシベリアに送られた。父は敗戦後の奉天で、開拓団などの避難民の世話をしながら、発疹チブスで死にかかったという。妹は、ソ連兵の目を避けるため男装して寝ずの看病をした。私自身は18年に旧制高校に入っていたが、肋膜炎で千葉県の郷里で寝込んだまま動けなかった。延吉などに1996年に行ったことがあるが、死ぬ前にもう一度、満州に行つて来たいという思いがあった。満蒙開拓団のゆかりの土地などを訪ねるといふ今度の旅の企画は、渡りに船という感じだった。

「嗚呼 満蒙開拓団」の映画の、岩波ホールでの上映の初日に出かけたのは、方正友好交流の会と大類事務局長とのお付き合いがあったというご縁による。大類さんは、私の参加している日中関係研究所の事務局長でもあって、その研究会に出ているうちに、方正の会にも顔を出すようになったという次第である。満蒙開拓団の悲劇は、中国残留邦人の悲しい物語とともに、私の心のどこかにこびりついているらしい。

さまざまな不運や悲運、さらには軍事行動によって沢山の日本人が亡くなった一方で、日本の侵略政策のために失われた中国人多数の命が眠っているのが旧満州である。それらの人々の霊を慰めることができれば、というのも、余命いくばくもない老いの身の感傷であろう。

歴史に学ぶ

宿泊した中国東北部の4つの都市（延吉、牡丹江、佳木斯、ハルピン）は、どこも新築の高層ビルが林立する大都会だった。そのほか開拓団の多数の避難民が集結して難死した方正県も、731部隊が「悪魔」の秘密施設を構築したハルピン郊外の平房地区も、同じように大市街地になっている。改革開放政策後の30年間の経済発展は、多少の遅れはあるとしても確実に東北部にも及んでいた。旧満州時代の日本のホテルや建物が活用されていた時代は、もう過去のものだ。旧間島省領事館の官舎、牡丹江の旧満鉄社宅などが一部使われているのを見たが、周囲と比べるとがらくた同然のみすぼらしさだった。

旧開拓団の崩れかかったような農家の一部が、牡丹江と佳木斯の間の大八浪郷にはまだ残っていて、活用されていた。これが農村の貧しさを象徴しているのかどうかはわからないが、まさか観光用ではないだろう。高速道路の沿線の沃野のなかに点在する農家の風景は、特に貧しさを感じさせるものではなかった。農民の貧しさや、貧富の格差の途方もない拡大は厳然たる事実とされているが、行きずりの私たちに、簡単に見えるようなものではあるまい。見えたのは、秋の陽に輝く収穫期の広漠たる沃野と、ぴかぴかの大都会と、至る所に張り回らされた携

帯電話のアンテナだ。その昔に繰り広げられた日本軍の侵略も、抗日パルチザンの苦闘も、中国農民の災難も、日本人移民団の悲劇も、歴史への想像力を働かせて思い浮かべるしかない。

旧間島省の領事館のあった龍井市の公園で、トランプ遊びをしていた老人たちの一人が、しっかりした日本語で私たちに話しかけてきた。昔のことなどを、懐かしそうにとめどなく話した。写真を撮ったので、送るための住所を聞いたら、「子供の所にいる」と言うだけだった。日本人に対しては、相当なうらみつらみがあったはずだが、それは言わなかった。私は日本の革命詩人、楨村浩の「間島パルチザンの歌」（1932・3・1）を思い出していた。その一節はこんなふうだ。間島とはこういう所だったのだ。

おお、日章旗を翻す強盗ども！ 父母と姉と同士の血を地にそそぎ
故国からおれを追い いま剣をかざして間島に迫る日本の兵匪！
おお、お前らの前におれたちがまた屈従せねばならぬと言うのか
ふてぶてしい強盗どもを待遇する途をおれたちが知らぬというのか

中露国境の綏芬河の南約22キロ東寧の旧日本軍要塞は、1945年8月9日のソ連軍侵攻に見舞われたところだ。牡丹江の第一方面軍司令官から関東軍山田乙三総司令官への発信「第一報。東寧、綏芬河正面の敵は攻撃を開始せり。8月9日午前零時」などを、関東軍報道部へ駆けつけた満州国通信社の山田一郎記者が確認して、「ソ連、全線にわたって侵攻」の第一報記事の原稿を書いたという（新聞通信調査会報、第562号）。山田記者は戦後、共同通信記者となり、私の職場の先輩だった。このソ連軍の侵攻が、その後の満州での日本人の受難を一挙に拡大したのだ。小高い山の中腹にある要塞跡への長い階段を登る体力のない私は、見学を取りやめる羽目になった。近くの歴史陳列館は見たが、その庭に聳えていた「蘇聯紅軍烈士記念碑」には、敬意を表する気になれなかった。

最終日に訪れた、ハルピン市街の南20キロの平房区にある「侵華日軍第731部隊遺址」はやはりすさまじいものだった。ネットで検索すると「731部隊」は80万件以上もあり、知識を得ることは易しい。私自身は、ずっと労働運動に付き合ってきたので、この種の事柄は「分かっている」積もりで過ごしてきたのだが、現地で見ると「現物」の迫力はまた格別だ。

遺址の前の広々とした大通りには「新疆大街」の標識があった。最近の新疆ウイグル自治区での民族差別反対運動に、つい思いが及ぶ。中国政府は、ウイグル人の抗議行動をいわれなきものと弁明している。しかし旧満州の「五族協和」の標語の偽りを告発して闘ったのが中国共産党ではなかったか。中国もやはり、歴史に学ぶ必要があるのではないか。

「現物」と言えば、旅行団のメンバーには、開拓地から方正への避難行の途中で3人の妹さんを失った末、方正では沢山の難死者を積み上げて火葬にしたという悲痛な思い出を持つ吉泉さん（「嗚呼満蒙開拓団」に出演）など、歴史の生き証人が何人かおられた。この方々のお話に接したことも、私には身の引き締まる体験だった。

詠草 以下、つたない歌に詠んでみた旅行中の感懐である。

延吉にて

民衆の苦難の歩み跡見えず延吉栄えビル林立す
朝鮮の粗鋼を運ぶトラックの列緩やかに凶們大橋
豆満江静かに流れ遊覧の小舟もありてなにごともなし
能弁に日本語を話す間島の朱相仁老よ健やかにあれ
間島に総領事館在りし日の遺跡に楡の梢静まる
楨村（浩）が間島パルチザンの歌詩いし昔はるかなるかな

満蒙開拓団

侵略のたくらみ果てし満州の沃野は黙し秋の陽照れり
あかあかと秋の陽照れる満州の野に聞こえずや鬼哭啾々
「嗚呼満蒙開拓団」の跡に祈る非命に逝きし魂よ鎮まれ
松花江悠然として流れたり佳木斯の朝に陽は昇り来ぬ
方正は日本人墓碑のみならず革命烈士記念碑も建つ

731部隊跡

侵略の非道の極みここに見る日軍731部隊跡
人類の愚行にページ加えたる侵華日軍731部隊
核弾を細菌弾を瓦斯弾を人類はいまだ持つにあらざや
人類の愚行を糺す道しるべ非武装九条世界に広まれ

（もろおか・たけお：1926年千葉県生まれ。52年共同通信社入社、社会部、経済部を経て論説委員で定年退社。現在日本記者クラブ、日本労働ペンクラブ会員）